

昔むかし、金持ちの子とまずしい家の子が兄弟のようになかよくなりました。

あるとき、ふたりは遠い国へ旅に出ることになりました。どんだん歩いていくうちに、日が暮れてしまいました。すると、宿屋があつたので、ふたりはそこに泊まりました。

ふたりは、六畳敷の部屋に寝かされましたが、まずしい家はなかなか寝られません。目をあけて、いろりのほうを見ていると、夜中ごろ、宿屋のおかみさんが入ってきました。そして、いろりの灰を、まるで田をたがやすようにかきまぜて苗代を作り、稲のもみをまきました。すると芽が出て稲がのびたので、田植えをしました。田の草取りをしていると稲の穂が出ました。そこで稲刈りをして、もみすりしてつくと、米になりました。おかみさんは、それで餅を作って部屋から出ていきました。

ふしぎなこともあるもんだと思っっているうちに夜が明けました。

おかみさんがふたりを起こしにきて、

「朝ごはんができました」といって、お茶とおいしそうな餅を出してくれました。まずしい家の子は、そつと金持ちの子のそばにより、ひぎをつねって、

「あの餅、食べちゃだめだよ」と小さい声でいいました。ところが、金持ちの子は気づかずに、餅を食べてしまいました。

ひとつめを食べるまでは何ともなかったのですが、ふたつめを食べたとたん、金持ちの子は馬になってしまいました。馬は、涙をたらたら落として泣きました。まずしい家の子は、

「おれがあれほどひぎをつねって教えたのに。でも、きつともとの人間にもどしてやる。しばらくしんぼうして待っていてくれ」といって、馬になった友だちとわかれて宿を出しました。

男の子は、長いあいだ、あちらこちら旅してまわりました。

ある日のこと、七十歳ばかりの白髪のおじいさんに会いました。男の子が、

「おじいさん、おじいさん。教えていただきたいことがあります」というと、おじいさんは、

「何が知りたいんだ」とききました。

「じつは、宿屋のおかみさんがいろりの灰で米を作り、その餅を食べた私の友だちが馬になつてしまいました。どうしたら友だちをもとの人間にもどすことができるか、教えてもらえませんか」

すると、おじいさんはいいました。

「よしよし、教えてやろう。この道を行くと、一反畑いったんばたけに一反のなすを植うえたところがある。そのなかの、東がわに実のなつた一本から実を七つとつてきて、その馬に食わせるといい」

男の子は、

「ありがとうございます」とお礼をいって、道を進んでいきました。

しばらく行くと、一反畑に一反のなすを植えたところがありました。けれども、どんなにさがしても、東がわに四つ実のなつた木はあつても、七つ実のなつた木はありませんでした。

そこで、また先へ歩いていきました。すると、また一反畑に一反のなすを植えたところがありました。そこには五つ実のなつたものしかありませんでした。

また先へ行くと、そこには、六つ実のなつたものしかありません。

どんどん歩いていくと、ようやく、一本に七つ実のなつたなすの木がありました。

「これだ、これだ」

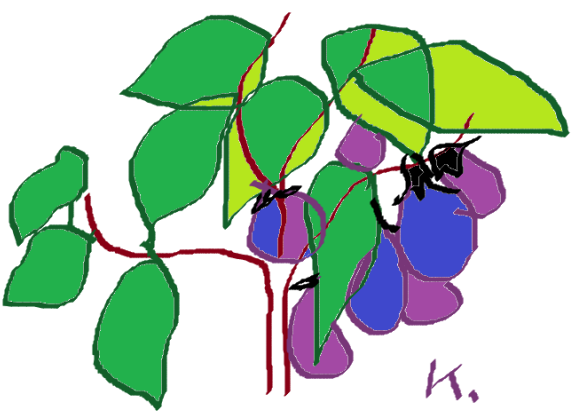
男の子はおおよろこびでなすを七つもぎ取ると、いっときも早く友だちを助けようと、走つてもどりました。

宿屋に着くと、馬になった金持ちの子は、おかみさんに引かれて田んぼへ行くところでした。よく見ると、馬の背せなか中は傷きずだらけです。おかみさんがそばをはなれたすきに、男の子は、

「さあ、きばつてこのなすを食べろ」といって、なすを馬に食わせました。馬は、四つまではサクサク食べましたが、五つめになると、

「もう食べきれないよ」といいます。男の子は、

「なにいうんだ。これを食わなければ、おまえはいつまでも人間にもどれないぞ」と叱しかって、またひとつ食わせまし



た。馬は、なすをひとつ食べるたびに、いやがつて首をふりましたが、男の子はむりやり食べさせました。すると、七つめを食べたとたん、馬はもとの人間にもどりました。ふたりはそこをぬけだし、走って家に帰りました。

家に着くと、金持ちの子の父親が、

「どうしてこんなに遅おそかったんだ」とききました。そこでふたりは、ふしぎな宿屋に泊まって金持ちの子が馬にされたこと、まずしい家の子がみつけた七つのなすを食べてもともどったことを話しました。

金持ちの子の父親は、よろこんで、あるだけの財産ざいさんをふたつに分けて、ひとつをまずしい家の子にくれました。そこで、まずしい家の子も大金持ちになったということです。

村上郁再話

資料『昔話研究二―一四一』民間伝承の会